

職人の技

シリーズ²⁹
〈シンガー・ソングライター／ソムリエ〉

野田 幹子 さん

「香」と「音」で、カノ

ン。野田さんが拠点とするワイン・バー「カノン」は、その名の通り、2つの顔を持つ職人としての表現の場である。「好きなことは仕事にしないほうがいいと思ってた」という野田さんだが、結果的に選んだ仕事は、どちらも心の底から愛するものだった。

「大学受験以上の勉強を、もう一度したかった」

それがソムリエを目指す1つのきっかけだったと野田さんは言う。

「音楽活動は、どんなに頑張っても点数が出るものはありません。評価は人それぞれ。チャートはありまされどそれは違う評価ですし…。達成感が欲しかったんです。100点を取る

ような」

歌は楽しい。音楽を通じて、ライブを通じて、何かを伝えることの喜びを感じていた。それでも芽生えた自分自身への不安を、猛勉強という形で抑え込もうとしていたのかもしれない。

その想いは、合格という成果で納得させることができた。だが、ソムリエにとつてそこは出発点ではない。知識を武器にサービスのを行う人であり、サービスの裏付けとして知識を持つ人であること。

「でも、飲食業界で仕事をするには無理だと思っていた。性格的に向いていない

だろうって」

そのとき、運命的な出会いがあった。世界的にも著名なソムリエ、田崎真也氏である。

「君は絶対に飲食サービスに合っている、と。確かに人に喜んでもらうのは好きです、今も楽しくやっていますから合っているのかも。正直、今でも合っているかといわれると疑問ではあるけれど（笑）」

決意を固めて…というよりは、運命のいたずらのまま流れて踏み込んだのだろう。しかし、ここからの日々が、猛勉強の日々よりも過酷に野田さんを追い込むことになる。「最初に働き始めた時は、

45席が朝4時まで満員という

店で駆け回って、カノンを立ち上げてからはテレビ、ラジオ、ワイン・スクールでの講師、店では接客はもちろん、仕入れ、伝票、棚卸し、搬入…人が足りなくなれば面接。戻って原稿書き。そんな毎日が続く、人間って笑えなくなるんですね。気持ちでは笑おうとしているのにほおが動かかない。過労がピークになってお店で倒れたことも。そのときでも、お願いだから救急車のサイレン聞こえないようにして来て、なんて店のことを考えている自分がいるんです（微笑）」

苦難の日々を屈託のない笑顔で振り返る野田さんだが、実際にワインを求めるさまざまな人々との関係を重ねていくことでしか到達できないソムリエは、また「100点」の

ない世界。結局は日々明確な答えの出ない戦い。苦しさはないのだろうか。「うーん、そういうのを見せてもしょうがないと思うんです。鼻水たらして泣いた日もありますけど（笑）。わたしはワインに詳しい明るいお姉さんでいたいと思っていますし、なによりも、またここに来たいな、と思っただけならば、ここに来た皆さんのいろいろな想いで、いろいろな色に染まりたい」

カノンの席数はカウンターと小さなテーブルの16。これが、

16席の、ライブ



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase
写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



野田さんが来店客の気持ちを
受け止め、そして想いを返す
ためのちょうどよい空間。こ
れ以上でも以下でもない。
「来てくださる方々お一人お
一人の想いを受け取って、わ
たしが伝えたいことを伝える。
これはライブもソムリエも変

わらない楽しさ。カノンでも、
その日その日がライブなんで
すよ」
好きなことを仕事にした。
2つも。結局はそれで良かった
のだ。それが野田さんの元氣
の理由なのだろうから。
「ソムリエに集中していると

音楽に自然に取り組みたくな
ることがあります。いいバラ
ンスですね。そうそう、わたし
の音楽と、ワインとお料理を
一緒に楽しんでいただくコンサ
ートをやっています。うん、右
手にワイン、左手にマイクつて
感じで（笑）」



PROFILE

のだ・みき
大阪出身。1987年「太陽・神様・少
年」でデビュー。アーティスト活動のみなら
ず、田崎真也氏に師事し、97年にソリテ資
格を取得。翌年には六本木にワイン・バー
をオープンさせる。そのほかにも、チーズ・
プロフェッショナルの資格取得、シャンパ
ニエ騎士団よりシユヴァリエに任命される
など活動の幅を広げながら、初のシン
ガー・ソング・ソムリエとして活動中。
BEST ALBUM『Black
Veilve』発売中。